保護者面談シート

⑴保護者面談準備メモ　⑵保護者への質問リスト

解決志向のキーワード　リソース／例外／コンプリメント／望む未来像

主な目的：保護者との面談を充実させ、より深い子ども理解や支援につなげる
活用場面：保護者との面談や個別相談の事前準備やガイドとして

このワークシートのねらいは…

保護者とは毎日会うわけではないですし、話をできる時間も限られているので、面談の機会があれば、効果的・効率的に話を進め、その機会を活かしたいものです。

このワークシートは、保護者との面談をより充実させるための「覚え書き」として利用するために作成しました。子どもが何かしらの問題や課題を抱えていたとしても、学校や教職員が収集してきた情報と、保護者から得られた情報とをあわせていくことで、より多くの手立てを見つけていく「よりどころ」となるでしょう。

⑴ 保護者面談準備メモ

面談では、まずは事前準備が欠かせません。ただ漠然と「がんばっていますよ」「よくやっています！」と保護者に伝えるだけでは物足りない面談になりがちです。できるだけ具体的で細かいエピソードをもとに話を進めることが大切です。課題があっての面談であればなおさら、子ども本人のもつリソースをしっかり意識していないと、課題について共有するだけで面談の時間が終わってしまいます。このワークシートには、さまざまな観点からリソースを見つけておくための項目がリストアップされています。

⑵ 保護者への質問リスト

保護者との面談の中で聞いておくと役に立つと思われる内容がリストアップされたワークシートです。子どもについていちばんよく知っているのは保護者です。学校での様子を伝えるだけでなく、保護者からいろいろなエピソードが引き出せると、さらなる子ども理解や保護者との信頼関係につながり、その後の指導や支援に役立つことでしょう。

実施方法とアレンジのポイント

可能であれば、日頃から時間のあるときに、ワークシート「保護者面談準備メモ」に示したような内容についてメモしておくといいと思います。気がついたときに付箋に書いて、貼りためておくというのもいいでしょう。保護者との面談だけでなく、子ども本人との面談、ケース会議、所見を書くときなど、他の場面でも活用できるかもしれません。

また、自分の見取りだけでなく、他の先生から見た本人の姿についても聞き取って

おくと大変役に立ちます。子どもは場面や相手によって、さまざまな様子を見せるものです。

事前に集めておいたエピソードや保護者への質問リストは、あくまで面談の補助ツールです。項目にある内容のすべてを話すこと、すべてを聞くことが目的ではありません。話の流れの中で、自然なタイミングで、必要な内容を扱ってください。

ただし、質問リストの中で、できるだけ聞いておきたいのは、「わが子に対して、どんな大人に成長してほしいと思っているのか（親の願い）」「そのために意識していることは何か」ということです。保護者がもっている子育ての解決像を聞いておくことで、話がかみ合いやすくなるものです。保護者にとっても、改めて尋ねられることによって、漠然としていた思いが明確にできたり、意識的に考えるきっかけになったりします。

留意点＆困ったときの対応のヒント

急に保護者と面談することになった

急に保護者と面談することになり、事前に準備ができていないという場合もあると思います。そのようなとき、面談の前にワークシートの項目に目を通しておくだけでも、少し客観的に子どもの様子を振り返ることができ、話すことが整理されたり、面談の展開の心づもりができたりします。

課題（問題）やトラブルによる呼び出しの面談の場合など

課題の多い子どもほど、よく準備をしておかないと、ネガティブな話を伝えるのみで終わってしまいます。たとえ、課題やトラブルなどによる呼び出しの面談であっても、本人のリソースをさまざまな角度で集めておきましょう。抱えている課題について話をしないほうがいいということではなく、課題を一緒に解決していくためには、より多くのリソースを発掘し、それを活かしていくことが必要だということです。

一方で、ネガティブな話を中和するために、リソースがあるからといって、必要以上に子どもをほめようとすることは避けたほうがいいでしょう。話が脱線してしまったり、場違いな感じになってしまったりする可能性があります。課題をしっかり認識した上で、本人のもっている力（リソース）を確認し、改善に向けて、できそうなプランを練っていくためにリソースを活用するというプロセスが大切になります。

学校で見る子どもの様子と保護者の話が異なる

学校で見る子どもの様子と保護者の話が異なることは、よくあると思います。学校と家庭では環境が異なりますし、求められることも違います。どちらが子どもの真の姿なのかということを考えてもあまり意味がありません。

どちらも本人の姿であることを保護者と共通認識をした上で、「場面が変わるとできることがあるならば、他の場面にも広げていける可能性があるのではないか」と考えます。その場面ならできるという理由を保護者とともに検討し、他の場面でできるようになるヒントを得たり、その子どもの力を多面的に考えるきっかけにしたりするといいでしょう。